

より多くの児童が学びやすい授業作りについての一考察

—MI（マルチプル・インテリジェンス：多重知能理論）を活かした授業実践を通して—

所属校：品川区立浜川小学校

氏名：深尾 絵美子

派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：発達障害児・授業のユニバーサルデザイン化・MI（多重知能理論）・八つの知能

I 研究の目的

1 問題の所在

2003年3月「小・中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン」が文部科学省から出された。その中には【LD、ADHD、高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童は、約6%の割合で通常の学級に在籍している可能性がある】と示されている。このことから、次の2点が必要だと考える。

(1) 児童の力を多角的に見る

通常の学級に在籍する発達障害児の多くは、知的な問題を伴わない。知力を構成するものは、知能と考えられている。そして、これまでの知能概念はIQという一方向にのみ方向づけられた知能で、知能検査で測られるものとし、言語的知能、論理数学的知能、空間的知能に限定して考えられていた。しかし、通常の学級に在籍している発達障害児などの支援を必要としている児童をそのように一方向の知能で見るとは、発達障害の特性を考えるとそぐわない点があることに気付く。そのために児童の力を多方面から見取り、実態に応じた指導が重要となるが、その際に児童を多角的に見る「視点」が必要ではないかと考える。

(2) 授業のユニバーサルデザイン化

どのクラスにも発達障害児がいる可能性があるとなると、個別で特別な手立てが必要である。それは有効であるのだが、そこからさらに「授業のユニバーサルデザイン化」の考えがでてきた。支援が必要な児童だけではなく、もともと多様な児童生徒がいることを前提に、多様なアプローチを用意する考え方である。これからは、クラスの児童の学びにくさを最小限にし、多様な学びを保障する「ユニバーサルデザイン化」された授業が必要だと考える。

2 研究の目的

1 (1) (2)の理由から、MI理論（マルチプル・インテリジェンス、多重知能理論）以下MI：の考え方を活用した授業をすることで、児童を多角的に見る視点がはっきりし、授業のユニバーサルデザイン化に適しているのではないかと考えた。

(1) MI理論について

1983年にアメリカのGardner, Hが提案した知能理論である。認知心理学者で、神経心理学者でもあるガードナーは、人はみな複数の独立した知能をもっていて、一人一人がそれらの知能を個別的なやり方で組み合わせて用いているという考えで、スパイマンが一般知能として「あらゆる知的活動に共通して働く知能」を想定した次元性の考えに対して批判を向けたものである。ガードナーの提案する独立した知能とは①言語的知能②論理数学的知能③音楽的知能④身体運動的知能⑤空間的知能⑥対人的知能⑦内省的知能⑧博物的知能の八つの知能としている。その特徴は、従来の知能と、音楽的知能や身体運動的知能を同等なものとし、さらに対人的、内省的知能のような、従来は社会性や人格特性とみられていたものも知能概念に組み入れたところである。

(2) 研究の目的

上記のようなMIの考え方は、児童を多角的に見ることができると同時に、複数の知能を意識しながら指導の内容と方法を考えることができる。このことは、支援の必要な児童が意欲的に授業に参加でき、授業のユニバーサルデザイン化にも有効であると考えられる。そのため、MIを活用した授業を自ら実践し、授業を展開したときの利点や課題点などについて、考察することを目的とした。

II 研究の方法

対象は臨床実習校の1年生、3年生、5年生で授業実践は9月に行った。

(1) 研究の流れ

- ・校内研究にてMIの説明（早稲田大学 本田恵子教授）
- ・八つの知能の傾向アンケート調査（荒川 2009/児童による自己申告）
- ・アンケート調査を参考にした授業作りと授業実践
- ・担任が抽出した学習面で日常的に支援が必要な児童の授業中の行動を、ビデオ録画にて観察
- ・授業後のアンケート調査（3, 5年生）
- ・担任の先生にアンケート調査（1, 3, 5年生）

(2) 授業実践の内容

<1年生>国語「かずとかんじ」4時間<3年生>国語「ちいちゃんのかげおくり」9時間<5年生>国語「未確認飛行物体」2時間「カンジー博士の暗号文」3時間

Ⅲ 研究の結果

(1) 1年生

事前のアンケートでは、クラス全体では音楽的、身体的知能が高い傾向にあった。そこで、CDで数え歌を流したり、カルタを用いたりして音楽的、身体的知能を活性化させる授業展開を考えた。授業展開を考える際は数え方や漢字の読み書きの内容なので言語的知能ばかりを優先しがちになるところだが、意識的に他の知能を組み合わせることを考えることができた。児童の反応は、どの活動にもそれなりの反応は示していたが、全員がそれぞれの知能を刺激した活動に意欲的だったわけではない。担任が抽出した児童は、音楽的知能を活性化することを意図した活動には、反応がほとんどなかった。しかし、身体的知能、数学的知能を活性化させる活動では意欲的に参加していた。また、本人のアンケートでは、視覚・空間的知能が若干高い傾向があり、そのアンケートと授業での関連が見られたと思われるのは、絵本の読み聞かせの時だった。

(2) 3年生

クラスのアンケート結果は、視覚・空間的知能が少し高く、言語が少し低かった。担任の先生からの希望で、対人的知能を毎回取り入れた。グループでの話し合いをほとんどしたことがない状態からの授業だった。加えて戦争教材なので、感じたことを絵でも文章でも表せるようにワークシートを工夫した。その結果、クラス全体では、感じたことや読み取ったことを絵で表現する児童が3分の2だった。絵と文を同時に使ったり、文だけだったり、そのときの表現しやすい方法を選んでいった。対人的知能では、グループの人の考えを聞いて書き足したり、自分のかいた絵を懸命に説明したりする姿が見られた。支援が必要な児童は、熱心に絵をかいていた。その絵は物語の文脈にそったものだった。また、発言もして、意欲的だった。

(3) 5年生

事前のアンケートでは、クラス全体では言語的、視覚・空間的知能が少し高い傾向にあった。「未確認飛行物体」では、地球儀や人工衛星の写真を使って視覚・空間的知能を活性化させた。また、教材の詩を学習する前に、詩の主人公である「薬缶」について連想することのマップ作りをした。対人的知能を活性化したのだ

が、このときは同時に言語的知能も活性化し、詩へのイメージがよりふくらんだ様子が見られた。支援を必要とした児童は、対人的知能が活性化することが学びやすかったようで、授業後のアンケートには「グループで勉強するとよくわかる」と書いていた。「カンジー先生の暗号文」では、対人的知能を活性化しながら授業を進めた。教材の内容から漢字を扱うことが多くなり、言語的知能の割合が高くなったが、言語が苦手な児童が、対人的知能の活性化で楽しいと感じた様子がワークシート記入の文章からうかがえた。

Ⅳ 考察

(1) MIの考えを活かした授業の成果

- ・授業を組み立てる際、働きかける知能を柱にできるので、複数のアプローチが意図的にでき、多様な学びができる授業が作りやすい。さらに、右脳と左脳に働きかける活動のバランスを考えると、より構造的な授業になると思われる。

- ・授業者は、八つの知能を意識しているので、児童を多面的に見ることになる。45分間で、集中できていない時間があったとしても「八つのうちの一つの知能が苦手なのだ」という見方ができたり、「〇〇的知能が得意なのだ」というアセスメントができたりする。また、そのアセスメントをもとに、児童の意欲を引き出す活動を作りやすくなると感じた。

- ・対人的知能を活性化すると、内省的知能や言語的知能が活性化する様子が見られた。独立した知能が他の知能を刺激し、学びやすくなることのあるのではないかと感じた。

(2) MIを活かした授業の課題

- ・意欲的な姿は見られるが、理解度や定着については今回の研究では測ることができなかった。

- ・八つの知能を授業作りの手段として活かすことの研究はできたが、独立した知能そのものを伸ばすための授業作りについては、検証するにいたらなかった。今後さらに研究を深めたいことである。

- ・MIの考え方を活かしていない授業展開との違いは、授業を組み立てるときの視点の違いに表れる。しかし、担任へのアンケートから「指導案を見ないで授業を見るだけでは、普通の授業との違いがわかりにくい」ことがあげられた。MIならではのよさを、今後はさらに明らかにしたい。

*1「教育と脳」永江誠二*2「授業のユニバーサルデザイン化」高橋あつ子*3「多元的知能の世界」Howard Gardner *4「脳科学を活かした授業を作る」本田恵子